

# はるか

ゆたかな暮らしの  
情報紙

令和5年夏号

「ありがとう」を花せるお葬式  
東京 千葉 埼玉 神奈川

孝行舎 株式会社 孝行舎

— お見積り無料 ご相談随時受付 —

本社：東京都足立区中央本町4-17-2  
葬儀サロン：東京都足立区中央本町1-19-2

0120-81-5548

TEL 03-3887-9090(代) FAX 03-3887-9091

孝行舎 検索

深夜・早朝でもご遠慮なくお電話下さい  
24時間・365日寝台車がお迎えにまいります

- すこやか「食」の旅—— オクラ
- ご存じですか? —— 「千利休」
- 伝統のモノ —— 畳
- 花ものがたり —— サルスベリ
- 生活の中の仏教語 —— 行水
- 仏事と葬儀の知識 —— 訃報を受けたら

すこやか  
「食」の旅

## オクラ

オクラというと「あのネバネバしたの?」と、その独特のぬめり感が苦手だという方もいらつしやるようですが、オクラの特色は「ネバネバ」だけではありません。

### ◆ダントツの美しさ

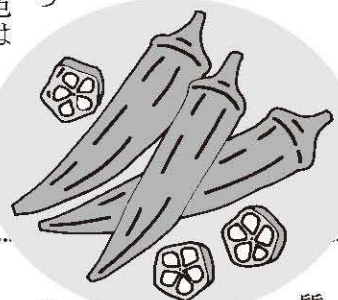
オクラの花をご覧になったことはあるでしょうか。どちらかといえば地味な花の多い野菜の中で、その花の際立った美しさには定評があり、園芸用の花々もかなわないほどです。

しかし、それも意外なことではなく、実はオクラは、観賞用の園芸品種の多いアオイ科に属する植物で、華やかな花を咲かせるハイビスカスやタチアオイなどと同じ仲間なのです。

因みに、オクラの花は、中心部の紫色と外側のクリーム色が鮮やかなコントラストをなしています。それには理由があり、花粉を運んでくれる虫たちを呼び寄せるために、花を目立たせて存在をアピールしているのだそうです。

### ◆夏バテに効くオクラ

「オクラ」の原産地は、北東アフリカの熱帯地域です。だから暑さに強いのか、暑くなるほど生育が旺盛になるといわれます。



オクラのネバネバの正体は「ムチン」という物質です。このムチンは、ほかにもヤマイモやレンコンなど粘りのある野菜に含まれ、胃の粘膜を保護する働きや整腸作用、食欲増進や夏バテ防止にも効果があります。

オクラにはムチンのほかに、食物繊維のペクチン、各種ビタミンやカルシウムなどもバランスよく含まれています。

### ◆「オクラ」はどの言葉?

日本で使われている「オクラ」という名称は、原産地アフリカの現地語を基にした英語の「Okra (オークラ)」を流用したものです。

オクラを意味する英語にはもう一つ「gumbo (ガンボ)」という言葉がありますが、この語源も、オクラを意味するアフリカの方言「kingombo」が訛ったものだといわれます。

ところで「ガンボ」は、アメリカ・ルイジアナ州の有名な郷土料理(※ヨーロッパやアフリカの食文化をルーツとした、とろみのあるスープ料理)の名前としても知られています。料理名となった由来は、本来この料理の具材には、とろみをつけるためのオクラが不可欠だったからだといわれます。もともいまでは、オクラを使わない「ガンボ」もたくさんあるようです。

#### クイズ

\*次のA~Cの中で、原産地がオクラと同じアフリカであるものはどれでしょう?

A	スイカ	
B	メロン	
C	トマト	

(正解は4面欄外に掲載)



私たちは、歴史上の人物など一般によく知られている人について「きつこういう人だったのだ」などと、思い込んでしまっている場合があります。しかし、ときには「こんな意外な面もあったのか」と驚いたり、「私たちとあまり変わらないじゃないか」と、その暮らしぶりに親しみを覚えたりすることもあります。



利休の茶会（正式には茶事といいます）とは、お客さまを招いて食事を供し、お茶でもてなすことをいいます。本来、茶会の客はせいぜい2、3人で、前半の初座と後半の後座に分かれます。初座では懐石料理が出され、お酒も供されます。

### ■利休の茶会

利休もまた家業に携わりながら、17歳にして茶道に親しむようになり、その才は師も驚くほどであったといわれます。

利休もまた家業に携わりながら、17歳にして茶道に親しむようになり、その才は師も驚くほどであったといわれます。

ご存じですか？

## 千利休

### ■商家に生まれた利休

千利休は、大永2年（1522年）、和泉国堺今市町（現・大阪府堺市）の有力者田中与兵衛の長男として生まれます。田中家は、干物や塩漬けの魚などを扱う問屋で、それら海産物を保管する倉庫も所有する納屋衆と呼ばれた裕福な商家でした。

当時の堺は、貿易船の発着港として栄え、アジア有数の貿易都市として発展しており、そんな活気ある土地で財を成した商人たちは、京都からもたらされる文化の担い手ともなっていました。

利休もまた家業に携わりながら、17歳にして茶道に親しむようになり、その才は師も驚くほどであったといわれます。

お茶でもてなされるのは後座になってからで、このほかに、お道具拝見などの作法も加わります。

利休は生涯で1000回にも及ぶ茶会を催したといわれていますが、世の中の表舞台に登場する以前、若かりし頃の利休の茶会はどのようなものであったのでしょうか。

たとえば、利休が23歳のときに催した茶会の記録（茶会記）によれば、客人は2名。茶懐石の献立は、飯椀、豆腐に土筆を添えた汁物、独活の和え物に麩の炊き合わせで、旬の食材を生かした質素な内容です。

また、手持ちの茶道具も限られていた利休は、茶会では同じ道具を使い回しすることも珍しくなく、その分、もてなしの創意工夫をすることで、客人の満足を引き出していたといえます。

### ■信長、秀吉の茶頭として

利休の茶人としての才は次第に広く知られるようになり、50歳を目前に織田信長に茶を献じる機会を得、その後、茶頭（貴人に仕えて茶事を司った師匠のこと）として登用されることになりました。

信長は、戦国武将の中では趣味人として知られています。茶の湯を政治的にも利用し、高価な茶道具を蒐集

しては手柄を立てた家臣に贈ったり、権力誇示のために盛大な茶会を催したり、あの本能寺の変の当日にも、自慢の茶器を披露する予定があったともいわれます。

その信長の後、豊臣秀吉に仕えるようになった利休は、秀吉の小田原攻めなどにも同行し、兵の士気を高めるために、陣営で茶会を開いたとも伝えられます。こうして秀吉の天下統一に伴走する形で、利休も茶人として高い地位と力を得るようになっていきます。しかし、秀吉と利休の信頼関係も、やがて崩れ去るときがやってきます。

### ■天下人の怒り

一説にそのきっかけは、天正17年（1589年）に利休の寄進により京都・大徳寺の山門が増築されたことにあるといわれています。寺側は利休への感謝の意をこめ、山門2階に「雪駄履きの利休の木像」を設えますが、それでは参拝者は皆、利休の足元を潜る事になります。

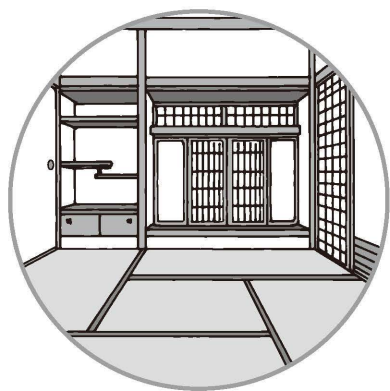
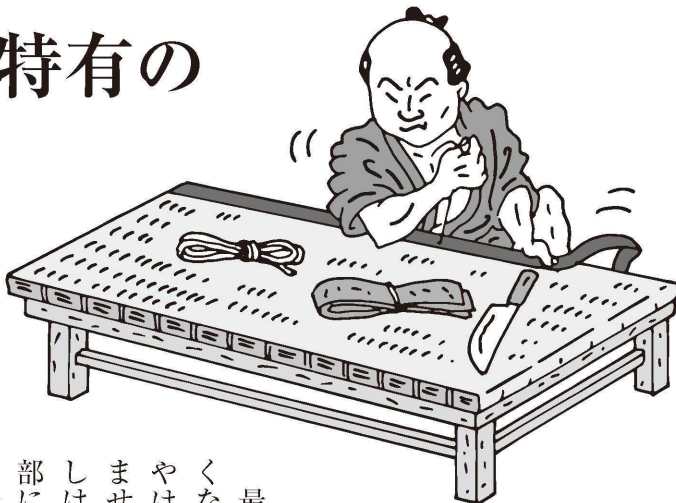
やがてそのことが秀吉の逆鱗に触れ、天正19年（1591年）2月13日、利休は秀吉によって堺に追放されます。そして同28日、京都・聚楽第にて切腹を命じられ、70歳の生涯を終えたと伝えられています。



# 伝統のモノ

## 日本特有の文化

### 畳



最近では、畳のない暮らしも珍しくないようですが、日本家屋といえ、やはり「畳」を抜きに語ることはできません。しかしながら、この畳が普及しはじめたのは、文化の発展した都市部においても、せいぜい江戸時代中期以降のことだといわれます。

#### 畳の起源

「畳」の語源は「たたむ」にあり、幾重にも折りたたんで重ねたものということから、古代では、畳は敷物全般を指す言葉だったといえます。

中国の史書『隋書』(636年成立)「東夷伝倭国」の中の、日本の風俗習慣などについての記述にも「草を編みて薦(\*莫座のようなもの)となす」とあります。

また『古事記』(712年成立)には、須賀多多美を敷くというように記述もみられます。この「須賀」は植物

の「菅」を、「多多美」は「畳」を指すといわれ、野生の植物などを用いて筵状にしたものを「たたみ」と称して、寝具や敷物にしていたことがうかがえます。

#### 「最古の畳」

現存する最古の畳は、正倉院に残る「御床畳」(\*一部が欠けて完全ではありません)という奈良時代の畳です。

この畳は、聖武天皇(在位724-749年)の遺品で、専用の寝台(御床)の上に載せて使われていたものだといわれます。全体のつくりとしては、真薦(イネ科の多年草)製の筵3枚を二つ折りにし、それを重ね合わせて6重にしたものを芯に、表面には蘭(イグサ科の多年草)製の筵を、裏面には麻布を当て、また、畳の縁には錦(\*華やかな彩りの紋様織物)の布を重ねて覆った痕跡があるといえます。

#### 絵巻物が伝える畳

『源氏物語』を主題とした『源氏物語絵巻』には、部屋の一部に畳が敷かれた寝殿造り(平安時代の貴族の住まいの様式)の宮内内部が描かれています。が、部屋全体にはまだ畳は敷き詰められていません。因みに、この時代の畳は、権力を表す座具としても用いられ、

官位に応じて、座る畳の大きさや材料が決められていました。

やがて、鎌倉時代から室町時代にかけて書院造り(現代の和風建築の基礎となる様式)が完成する頃になると、畳は部屋全体に敷き詰められるようになります。たとえば、鎌倉時代に描かれた『法然上人絵伝』の「浄土五祖像拜礼図」を見ると、俊乗房重源(\*浄土宗の僧)が中国から持ち帰った浄土五祖の画像を披露している部屋の床全面に、立派な畳が敷き詰められているのがわかります。しかし畳はまだ、極めて限られた階層の人びとの暮らしにおいてのみ使用されるものでした。

#### 庶民の畳

江戸時代になると、幕府の役職として、畳奉行が設けられるほど、将軍家や大名家にとって屋敷の畳の維持管理は大切な仕事でした。しかし、この畳が広く一般に用いられるようになったのは、明治維新後のことです。

そして、暮らしが洋風化した現在では、フローリングの床に「置き畳」をするなど、インテリアとしての畳人気も高まっているようです。

#### ★ご存じですか?★

##### 畳がもたらした「正座」

正座は、昔からの正式な座り方ではなく、畳の普及に伴って一般化した座り方です。



# 「サルスベリ」

夏の盛り、桃紅色の花をぎっしり咲かせたその姿は、遠くからでもよく映え、暑さを忘れてつい目が離せてなくなることもあります。



「サルスベリ」の語源は、毎年樹皮が剥けて木の肌がツルツルになり、サルでも滑って登れないだろうということから、このように名づけられたといわれます。

また、サルスベリは別に「百日紅」とも表記され、これは、百日ほどの長きにわたって紅の花が咲き続けることに由来します。ほかに、百日後に戻ると恋人に誓って旅立った王子が、戻ってみると恋人はすでに亡くなっており、その亡骸が眠る土地からこの木が生えたという伝説もあるといえます。

因みに、サルスベリは中国では古くより「紫薇」と呼ばれ、禁廷(宮廷)に植えられる貴樹とされていたそうです。貴い木ということからか、日本ではお寺に植えられることが多かったようです。

\*花言葉……「雄弁」「饒舌」など。

# 行水

「行水」という言葉は聞いたことはあっても、行水をしたことがあるという方は、今ではあまりいないのではないのでしょうか。

「行水」とは、夏の暑い日などに盥に湯や日向水(太陽で温まったぬるま湯)を入れ、それを浴びて汗を流すことをいいます。行水でさっぱりした後、浴衣を着て団扇片手に夕涼みをする——これぞ、ひと昔前の日本の夏の風物詩でした。しかし、今では盥ももうほとんど見かけなくなり、盥という言葉自体も死語になりつつあるようです。

仏教でいう「行水」は、食後に手や鉢を洗うことをいいますが、この語は後に、潔斎(神仏に仕えるため、けがれたものに触れず、心身を清らかにしておくこと)のために清水で身を洗い浄めることに用いられるようになります。またそのことから、俗世間では簡単な入浴のことを「行水」というようにもなり、烏の短い水浴びの様子から、風呂に入ってもよく洗いもせずにとささと出てしまうことを、烏の行水なぞと言ったりします。



# 訃報を受けたら

訃報を受けた際の対応は、故人あるいはご遺族との付き合いの度合いによって異なります。

普段から身内同様のお付き合いをしている親しい友人や知人は、何を聞いてもとりあえず弔問に駆けつけるのがマナーです。その際は、喪服を着用する必要はありません(しかし、喪家が遠方の場合は、通夜や葬儀に着る喪服や香典は用意していくようにします)。

この「とりあえずの弔問」は、遺族を励まし、通夜の準備などを手伝うためでもありますから、手伝いを頼まれれば、周囲の指示に従って引き受けるようにします。

一方、一般的なお付き合いの友人や知人の場合は、すぐには弔問をする必要はなく、通夜や葬儀に参列するようにします。

また、親しい関係にあるのに当人が都合で弔問に行けない場合は、近しい代理人に向いてもらい、お悔やみと代理の理由を簡単に伝えておいてもらうとよいでしょう。

(※ここで紹介する作法は、地域や喪家によって異なる場合があります)

